

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第83回

# 万葉の川心

横浜市教育委員会  
東部学校教育事務所 指導主事 澤井園子

秋の雑歌・七夕の歌九十八首

(巻第一〇 二二〇番歌)

秋されば 川霧立てる 天の川

川に向き居て 恋ふる夜ぞ多き

母の齢が米寿を迎える。活字が好きで、時折本屋へ行き、興味を引かれる本と出会えば買ってきて楽しんでる。先日、「終活」と名のつく特集記事が気になったらしく、うれしそうに、とある雑誌を買ってきた。人生の「正しい方」。結婚、就職、そうしたことのすべてを一連の「活動」とくくらずとも良いのではないかとも思ったが、母は「これで安心」「まだ生きるけどね」と笑顔で話した。振り返ると六十代は、「終わり方なんか気にしていたら、本当にその日が来そうで怖いから、好きなことをするの。」と語っていた。七十代は、「遺言」に興味をもち、数回書き直しては、そのたびに預かった。八十代に入ると、家中の整理整頓を始めた。「もったいない」「これは何かに使うかも」と取っておいた物が、自分にとってあまり大切ではないと思えば処分する。たとえ大切でも心の中に置くことでよしとする。そうして思い切つて物と離れるごとに、部屋はきれいになり、心も軽くなっていくように見えた。一口に老後と言つても人それぞれだ。老いたときの自分がどうなるかは分からないが、かつては祖母、今は母の老いを近くで見ると、ほんの少し、自分も自然に心の準備をしているのかと思う。

天の川は巻第一〇に、「秋の雑歌・七夕の歌」として九七首が納められている。旧暦なので、季節は秋。「柵機津女」という日本の機を織る女性と中国伝来の織女が重なり、一年に一度しか会えない七月七日は、せつない恋の物



東海道新幹線三河安城駅前舗道

語として万葉人の心をつかんだのだろう。「秋になったので川霧の立っている天の川よ。その川に向かい居て、恋しく思う夜の多いことよ。」秋になれば、もうすぐ会える。この川霧の向こうにいる恋しい人に、一年ぶりに会えるのだ。この日々は、さぞや長かったことだろう。電話も手紙も写真ですら、ましてやメールもラインもない中で、想い続ける強さはどれほどだろう。

現代から奈良時代へ一度だけタイムスリップしてみたい。漆黒の夜、降るような星の輝き、ひとときわ目立つ天の川、鹿の鳴く声、せせらぎの音、船を漕ぐ音、逢うことも許されない恋。霧の中に愛しい人を想う。また必ず会えることを信じて川縁に立つ。その時代にしか感じられないこともあるだろう。そして、変わらぬ何かもきつとある。写真の歌碑は、東海道新幹線三河安城駅前の舗道にある。毎年八月初旬に開催される「安城七夕まつり」の始まりは昭和二〇年。企画や開発などのすべてがこの安城駅周辺商店街の人々によって行われたそうである。

死を意識することで、生きている今を大切にできるのだと何かで読んだことを思い出した。天の川、三途の川もまた「川」である。母は向こう岸に行つたときに、誰と再会するのだろうか。この先も「終活」が長く続くことを祈りつつ、短冊を笹に結んだ。